

泉 いずみ

―目次―

表紙「蓮ワーク」

連載「ハヤブサ物語 23」

野呂ファミリー通信④

愛西市の自治を問う④

防災講演会

連載「私の出会った神様たち⑥」

母の死とビー玉①

さとのりの知恵を読む 32 「偏った見方」

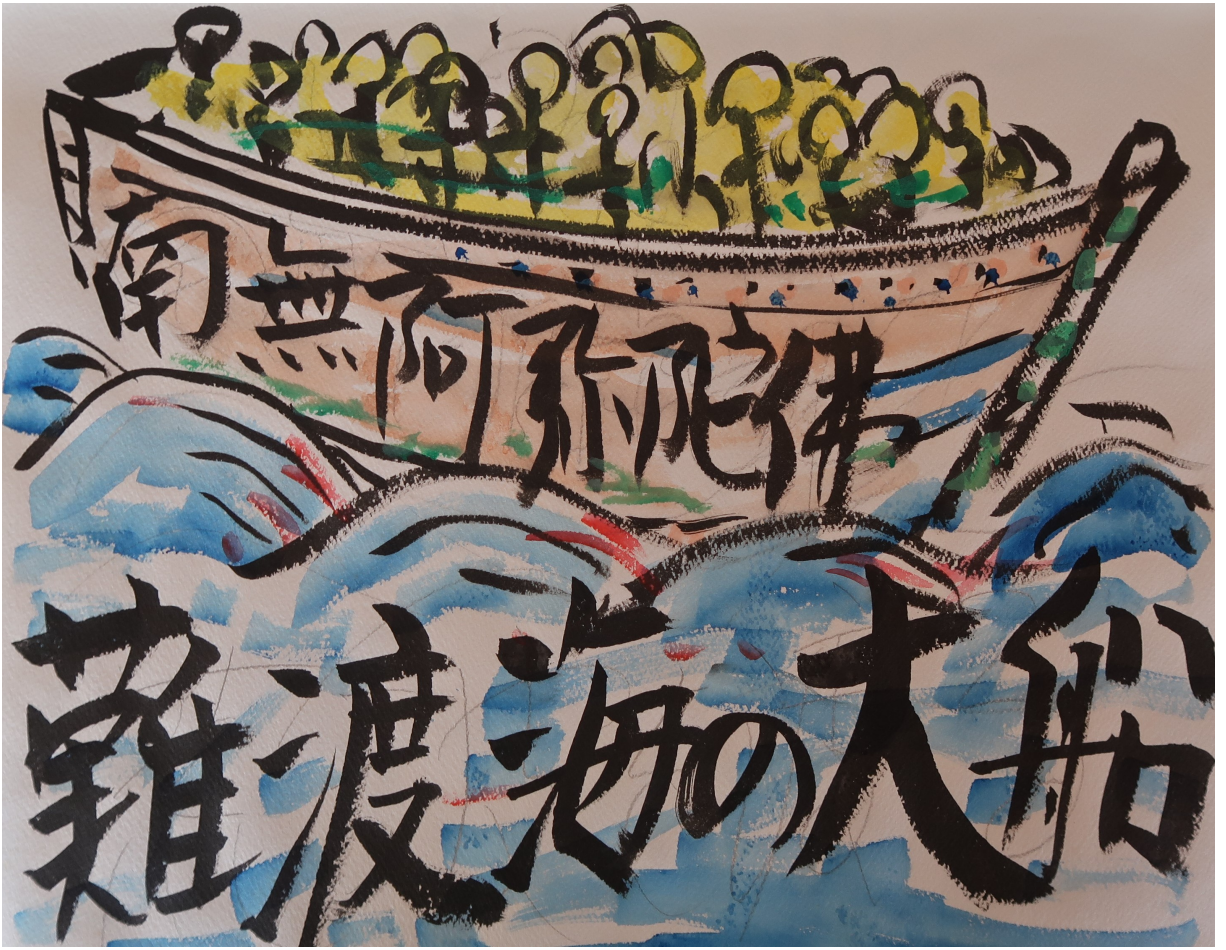
掲示板・お知らせなど



気持ちの良い10月の日差しを浴びて講師の岩本さんと一緒に蓮ワーク。小さな子どもも一生懸命。色とりどりの綺麗なハスの花盛り。モノクロなのが残念です。↓のQRコードでカラーでの写真が見れます。

蓮ワーク写真





◆「難渡海の大船」と絵に描いてある。人生はよく荒波に譬えられ、順風満帆という言葉があるが、むしろそのような時は極めて少ない。◆苦難の人生を渡ってきた人々がほとんどだ。東日本大災害の時、漁師の多くは、津波に向かっ船を沖に出した。命がけの行為だったと思う。大切な事は波に向かっ直角に舳先を向けること、絶対に腹を向けて逃げない事だ。◆「南無阿彌陀佛」の強固な船も阿彌陀さんという水先案内人がいなければ、人生の荒波を渡り切れない。◆僕はすべてを阿彌陀さんに任せきったおかげで、完全燃焼できた。これを涅槃というそう。◆来月号で僕のお話は完結する。涅槃はその時に話そうね。

(最終号に続く)

ご家族のトピックスが紹介されています。野呂ファミリーのご活躍を祈ります。来月号で完結します

ゆつたりとした生活が必ず見直される時代がすぐそこまで来ていると私は思います。

妻も、また中川町のポンプ温泉でゆつくり湯治したいと言っています。野呂総本家の安泉寺とも敏彦さんの通信を通して繋がっていきたいと思っています。

このファミリー通信を時報「いずみ」で紹介させて頂くことと、私が敏彦さんの通信に寄稿することをお願いしてキーボードから離れます。どうか、よろしく願います。

野呂美道 敬白

清水桃子さん (野呂康正の長女)

柚花(ゆずは)誕生しました。



さる4月の下旬、我が家に第一子が誕生しました。

大きな産声を上げて三五〇六グラム五十一センチの元気な女の子が生まれてきた瞬間は感動しました。

緊急事態宣言の狭間で面会が厳しく制限されている中ですが、主人は出産直後20分程度のみ面会する事ができました。

名前は柚の花の白く美しいイメージと花言葉の健康美から清水柚花(ゆずは)と名付けました。

退院後は毎日が初めての事だらけで大変ですが、夫婦で力を合わせて子育てに奮闘しています。これからの我が子の成長が楽しみです。

野呂 泰史さん (野呂敏彦の長男)

我が家は、子供が3人、元気で成長しています。

コロナ禍で、出かける場所も限られているので週末は公園、公園の水遊びです。

走り回り、ザリガニ採りを楽しんでいます。

子供3人目の汐里(女兒9カ月)ヨーグルトが大好きです(笑)

ハイハイで動きまわるのが早くなってきました。

困っているのが、犬のごはんとお水を直ぐにひっくり返してしまうことです。

皆様とのご縁を大切にしていきたいと思っています。

優太(8歳) 涼太(5歳) 汐里(9月)



長女 汐里

次男 涼太

長男 優太

手に持っているのはザリガニです。

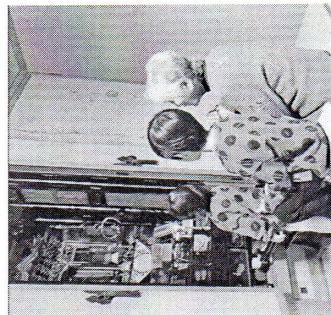
福田 雅弘さん (福田道子の孫・養子)

子供たちと祖母の、ほのほのとした関係

私は2年前から祖母の家の裏手に居を構えておりますが、コロナの時世もありなかなか家族で集まる機会も少なく、特に祖母は何でも1人でやる性分ですので、心配ではありますが先日家に行つた際には一回目のワクチン接種を終えたという事で多少安堵しています。先月は息子の誕生日に久々に祖母や私の面親も家に招き、会を催すことが出来ました。

私の2人の子供は、祖母を「みっちゃん」と呼び、孫の私でもそんな呼び方はしたことがないのに...と思いましたが祖母もそれを喜んでいるようなので放っておいたらそれが定着してしまい、「みっちゃんの家へ行こう」と当たり前のように言うようになってしまったのでもう手遅れだと悟り呼び名を変えさせることは諦めました。

...私の近況ではなく祖母の近況がメインになってしまいましたが、また情勢が落ちつき、皆様で集まる機会がありましたら、私も祖母に付いて、皆様で改めてご挨拶をさせて頂く機会があれば幸いに存じます。



仏壇に手をわせるひ孫 大谷幼稚園へ通っています。

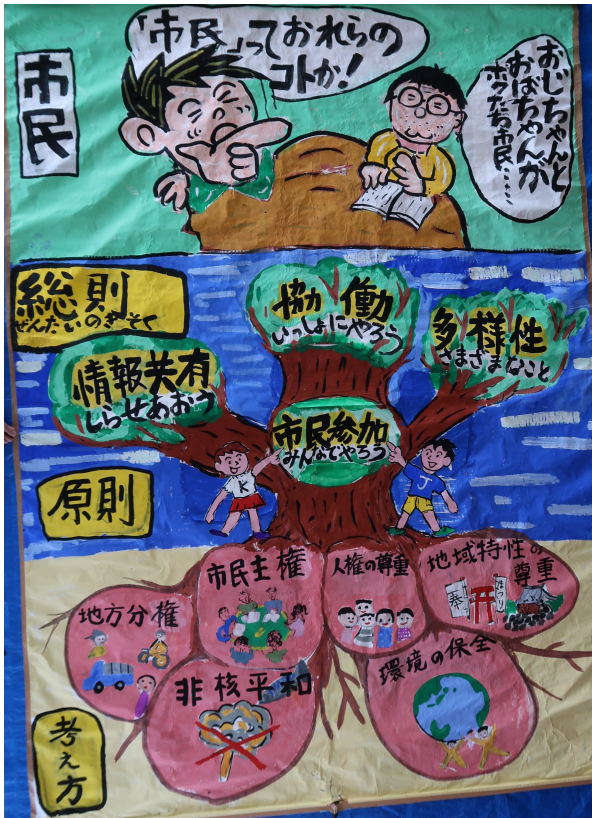
出前講座

◆最初は戸惑う事ばかりの出前講座だった。難しい言葉を並べても生徒には受けない。シナリオ段階でも困った。そうしたらある職員から絶妙なアドバイスを頂いた。◆「市長と市民の関係を校長と生徒に置き換えたらいいですよ。」なるほど、市長や職員は市民に奉仕し、よりよい生活を保障する。学校も生徒を育み、成長させる大切な場所である。◆シナリオは、学校の生徒が自ら考えを述べて、校内に自分たちの花壇を作り、運営するという一連の活動を、校長や教員、周りの大人たちが見守り援助するという筋書きで完成した。◆そして、それらを視覚的に表すために、▶1版の紙芝居を作り、学校の生徒、教員、PTA会長らの役を決めて、寸劇形式で行うことになった。◆何よりも大切にしたのは、生徒の興味を引くパフォーマンスをめざした事。演技する方も楽しんでやることを決めた。そして、生徒を劇中に参加させることも提案した。◆愛西市6校の中学2年生にはすべて行った。これは、愛西市で学び、将来市を担っていく可能性のある生徒が人生で一度だけ、条例に出あうことを願って私たちが考えた最良の方法だった。

改訂版

◆これらの活動が功を奏し、条例は見事制定された。他の市町では折角の条例案も議会で否決

されたところもあると聞く。愛西市は紆余曲折あったものの、前市長が提案して集めた委員に対して、否決したら申し開きが立たない、ということもあっただろう。難産ではあったが、無事制定されたことは何より嬉しかった。◆さて、これが出前講座は終わったわけではない。私たちは制定された後も、条例の普及を願って出前講座を続けていくことを決めた。◆シナリオの大改訂を行った。条例の骨子を超大型の絵で表わし、内容もガラッと変えた。そこにはある寺院の坊守の才覚が開花した。絵は2×3メートルほどの巨大なもの。稚拙ではあるけれども、仕掛けをほどこした、迫力満点のものだった。(次号完結編に続く)



◆十月二十二日、名古屋大学減災連携研究センター特任教授、新井伸夫さんによる市民防災講演会が開かれた。話の項目を①〜⑱にまとめたとめた。

①阪神淡路大震災で早く復旧した地区は、事前に災害時の話をしていた②10月28日は1707年の宝永地震と、1891年の濃尾地震が起きた日にち③私たちが今備えない姿を見せると、災害時に弱い愛西市民を育てることになる④水道管の更新は130年かかる⑤災害の様相は、日時、季節、地域の状態、人流など、その時の社会のありようが決める⑥共に頑張りましょうと行政に働きかけても、行政が応えてくれない場合、私たちはどうしたらいいのだろうか⑦関連死など、被災後に死ぬ人の何と多いことか⑧コアになる人への心のケアも大切だ。鬱になって自殺する人もある⑨情報が伝わってこない地域ほど、悲惨な状態になっていくことが多い⑩阪神淡路大震災では、命が助かったのは近所の人たちの力が大きかった。公的な救助は遺体で見つかるケースが多い⑪現状は年齢性別を問わず、多くの人が分析しよう。女性の力は大きい。逃げる時も何人かで逃げる。ネットワークがすばらしい⑫避難所に届いた物資や情報を、自宅で避難生活を送っている人たちに届け、伝える仕組みが必要⑬リーダーは情報を流し

ながら掴む必要がある⑭大型貨物で避難所に届いた物資を軽トラで地域に運ぶ必要がある。これらも事前に打ち合わせておくとスムーズに事が運ぶ⑮女性がよく気がつくものが多い。女性が女性に聞くこと。女性や障がい者も入れた意見をくみ取る避難所の仕組みが大切⑯酒におぼれるな。仮設でのストレスから孤独死を招くケースもある⑰アンケートを実施して、集計分析し、問題点を地域で考える工夫を⑱任期を問わない企画グループを結成し、提案する。あくまで提案のみ、実行は自主防災組織に任せる

◆私がおもったと思う項目は③だ。私たち大人が、子どもたちに、防災の大切さや、事前の打ち合わせをせずに、亡くなっていったら、子孫は思うだろう。「ああ、爺ちゃんや婆ちゃんたちは何もせず、無事に死んで行った。僕たちも何もしないでも災害なんて起きっこないや！」◆こうして、災害に弱い愛西市が誕生する。それを必死に食い止めるのは私たちの大きな責任ではないのか！

入場無料
先着300名まで!

令和3年
10月22日(金)
午後6時30分～

**文化会館
ホール**

**あいさい市民
防災講演会**

テーマ
地域を自らの力で
災害に強くしていく
ために

講師:新井 伸夫 氏
(名古屋大学減災連携研究センター特任教授)



▶講師プロフィール
神戸大学大学院理学研究科地球科学
専攻修士課程修了 博士(環境学)
専門は、地震防災、地域防災、自然災害科学。
行政連携や行政と産業界の連携に関する研究・実践の取り組みを実施。市民への啓発活動にも注力。

※来場の際はマスクの着用をお願いします。
なお、講演会当日(令和3年10月22日時点)、愛知県に「緊急事態宣言」が発令されている場合は、講演会の実施を令和4年度に延期させていただきます。あらかじめご了承ください。
*実施に関する情報は、公式ホームページ等にて随時お知らせします。

主催:愛西市 問い合わせ:愛西市役所 危機管理課 0567-55-7130

母の死とビー玉①

◆そして母は私が六才の時、四月七日の花の盛りに亡くなりました。その日はちょうど僕の誕生日でもあったのです。僕の誕生日と母の命日とはなぜか同じ日なのです。だから、父親の命日は忘れても、母親の命日は忘れませんですね。こんなところに親子の縁が結ばれているのかなと思います。◆四才で僕から離れて行った母は二年たって死にました。本当に別れたのは四才からと言ってもいいですね。本当に縁が薄かったと思います。でも誕生日と命日がいっしょということには縁の薄い親子に、せめてものつながりを持たせようというはたらきがあったのかも知れません。◆先程申しましたように、戦後初めて自分の家を見せてもらいに行きました。離れは無くなくなっていましたが形だけは残っていて、物置になっていたと言いましたね。そのとき僕はこの離れを見上げながら思いました。人間というものは面白いもので、すっかり忘れていたことでも、同じ場所へ行って、同じ形をして、同じポーズをとると、どっかに忘れていた記憶がポツと出てくるものだなと。◆先程言いましたように、当時母はどうしても僕に会ってはくれませんでした。行くと物をぶっつけて追い返されるのでした。僕は母を憎んで、二度と行かないと思ったのですけれど、でもやっぱり未練があつて、そのあとも

行っているのですね。◆夜中にそっと起き出して行っているのです。昼間、駄菓子屋さんで、ビー玉をいくつか買って買っておきましたね、それを夜中に行つて、離れの壁に投げつけるのです。そうすればびっくりして母が起きてきて戸を開けてくれるのではないかと思つたのです。叱られるかも知れませんが、叱られてもいいから、母の顔だけは出させたいという気持ちでやったのです。◆ところが投げたのですが、ビー玉は一つも戻ってこないのです。なぜ戻ってこないのか、これは後で分かることとでなければ、力を入れすぎ、高く投げすぎ、てしまったのです。ビー玉は屋根を転がってはきますけれど、も、雨どいの中に全部入ってしまったのですね。



◆この世のすべてのものは、みな縁によって現われたものであるから、もともとちがいはない。ちがいをみるのは、人びとの偏見である。◆大空に東西の区別がないのに、人びとは東西の区別をつけ、東だ西だと執着する。◆数はもともと、一から無限の数まで、それぞれ完全な数であって、量には多少の区別はないのであるけれども、人びとは欲の心からはからって、多少の区別をつける。◆もともと生もなければ滅もないのに、生死の区別を見、また、人間の行為それ自体には善もなければ悪もないのに、善悪の対立を見るのが、人びとの偏見である。◆仏はこの偏見を離れて、世の中は空に浮かぶ雲のような、また幻のようなもので、捨てるも取るもみなむなしなことであると見、心のはからいを離れている。「『華嚴経』より」

◎対立する意見から離れてみる

◆ブツダの教えをほぼそのまま書きとめているといわれる『法句経（ほつくきょう）』では、賢者（理想的な出家者）のことを、「両極に対する欲望をコントロールできる」人だと述べています。

◆この「両極」というのは、たとえば快樂と苦行といった、大きく二種類に分けられる生き方を指すようです。◆しかし、のちの研究者は、これを二つの対立する考え方だと理解しました。つまり、あるかないか、善いか悪いか、○か×かなど、相対立する真逆の考え方です。◆たしかにわたしたちは、複雑な問題であればあるほど、対立する両

極端の意見をまず設定して、問題を整理しがちです。そのほうが楽であり、一見わかりやすい議論ができるからです。◆けれども現実にある問題の多くは、そう簡単に○か×かだけで割り切れるものではありません。それなのに、強引にこういう区別をして考えてしまい、間違った結論を導いたり、誤った行動に走ったりすることが少なくありません。◆この『華嚴経』の言葉にあるように、大空には東西の区別などないのに、その空の下にいる人々は、東ではこうだ西ではこうだと言いつ争ったりするわけです。◆仏教においては、こうした偏ったものの見方を離れることの大切さが説かれています。◆また、「縁起」や「空」の思想にもとづいて、区別や対立などというものはそもそもないのだ、という根拠が明らかにされます。



十一月の行事予定

ハザード会 七日(土)

文芸クラブ 十一日(木)

ゴミゼロ・環境保全会植栽除草 十三日(土)

年番会 十三日(土)

写真クラブ例会 二十日(土)

今月の掲示板

難有ればこそ
有り難し

お寺の掲示板より

お知らせ

- ◆来年の法事の年回表を、該当するご家庭に同封しました。お早めにご連絡下さい
- ◆三和町以外に在住の檀家さんには、十一月の月参りの時に、保険料五千円を集めさせていただきま
- ◆恒例の「ほのぼのカレンダー」と、報恩講冊子をお届けします。ご活用下さい

訃報

- ◆高橋忠雄さん 四日市市 享年九十一才
- ◆林 正雄さん 四日市市 享年八十五才

在宅看取りを決意し、二人で命と向き合いながら、父と一緒に楽しく穏やかに過ごした六日間でした。「人間、感謝して生きやないかん。ありがと」とこの言葉は父から私への最後のプレゼントでした。

娘記

編集後記

◆今月号は時間がなくてコラムが書けず、お休みとさせて頂きました。申し訳ありません。(住職)

◆Kさんからの絵手紙です。今回は深い。人生も同じ。日常の繰り返しはこの罰と重なります。でも、その中に喜びや生きがいを見いだすことができますね(老僧)

